

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

RiITALIA (イタリア再発見) ⑩

## \* “Let it go” の詩学 \*

国司 航佑

ディズニーアニメ『アナと雪の女王』は、昨年2014年3月に本国で公開され、社会現象を起こすほどの大人気を博した。筆者は、機を逸してまだこの作品を鑑賞できていないが、映画と共に大きな話題を呼んだ挿入歌“Let it go”の方はYouTube上で何度も繰り返し聞いている。物語性の強い歌詞と盛り上がる曲調とが光る、素敵なテーマソングである。

ところで、YouTubeで繰り返し聞いているうちに気付いたことがある。この曲には各国語に翻訳されたヴァージョン、さらには同一の曲の中に様々な言語の歌詞を混交させた多言語版が存在しているのだ。この多言語版は、英語に始まり、その後、フランス語、ドイツ語、オランダ語と続くのだが、実はサビ(リフレイン)の部分で日本語が登場する。一番盛り上がる個所で「ありの～ままの～」と歌う松たか子の声が入ってくると、日本語を母語とする筆者にはいわく言い難い感情がこみ上げてくる。読者諸氏の中にも、そのような感覚を覚えた方もいるのではないだろうか。

The snow glows white on the mountain tonight  
Not a footprint to be seen.

A kingdom of isolation,  
and it looks like I'm the Queen,

(中略)

サビ

Let it go, let it go

Can't hold it back anymore

Let it go, let it go

Turn away and slam the door

I don't care what they're going to say

Let the storm rage on.

(Let it go の歌詞)

「ありのままの」という日本語に、いましばらく注目してみよう。「ありのままの」は、原文“let it go, let it go”の直訳ではないけれども、似たような意味合いを表している。だが、より顕著な類似は、実は音声面に見られる。まず、英語版は“o”という音で韻を踏んでいるが(上図下線部参照)、これは日本語版でも踏襲されている(「ありのままの 姿みせるのよ」)。だが“o”という音による押韻は、後に紹介するドイツ語版およびイタリア語版においても同様に行われている。日本語版のみにみられるのは、子音と母音の配置の仕方に関する共通点である。“let it go”という音のつながりは、発音そのものを忠実に表記するならば“leligo (u)”となるだろう。そこでは、子音一つにつき母音一つが付随しており、したがって子音の連続が存在していないことになる。日本語版「ありのままの ARINO MAMANO」は、子音と母音との間にあるこうした量的バランスを忠実に再現しているのである。

母音と子音の一対一の対応は、日本語を母語とする読者諸氏にとっては特別なことではないかもしれない。だが、ヨーロッパ言語においては、決して当然のことではない。現に英語版も、サビ以外の部分においては、子音の連続は至る所に見られる。例えば冒頭の二行“The snow glows white on the mountain tonight. Not a footprint to be seen.”を見てみよう。“sn”(snow)や“gl”(glows)

という 2 連続のみでなく、“tpr” (footprint) や “ntt” (footprint to) といった 3 連続さえあるのだ。また、母音が挟まっている箇所においても、“the” や “tonight” のように、いわゆる曖昧母音が使われている場合があり、全体として、子音のプレゼンスが強く感じられるようになっている。しかもそれは、“t” という同じ音がこの 2 行の間で何度も繰り返されていること(このような技法は文学用語で alliteration と呼ばれる)と相俟って、固く冷たく、そして鋭い響きを作り出している。

さて、ここまで英語歌詞の音声構造を見てきたが、その意味内容はどのようなものなのだろうか。上に示した最初の 2 行を試みに翻訳してみると、「今夜、山の上で雪が白く輝いている。足跡一つ見当たらない」となる。凍えるような寂しい情景の描写から、この歌は始まっているのだ。その後、山の吹雪との対比から、「私」の心の中のうごめきに焦点が当たり、サビに向けて盛り上がっていく箇所、いわゆる B メロになると、親のセリフ——「私」を隠し、よい娘でいなさい、という命令——が畳みかけるように現れる。だが、B メロの末尾、つまりサビの直前では、親に対する「私」の言葉が発せられる(「でももう、みな私の本性を知ってしまったわ」)。サビの “let it go” は、一種のイディオムであり、日本語に置き換えるならば「放っておけ」や「くよくよするな」といった表現に近い。しかし、B メロまでの流れを汲みつつ、“let … go” というまとまりが「…を解き放つ」という意味にもなることを念頭に置けば、“let it go” を「心を解き放って」という風に解釈することも可能だろう。いずれにしても、A メロおよび B メロにおいて表現された冷たくで閉じた世界から一転して、サビでは大胆で開放的なイメージが描出されていると言える。

以上のようなストーリー展開を念頭に置くと、英語原文の音の響きがいかにその内容を引き立てているかが分かるだろう。すなわち、冷たく孤独な場面においては鋭利な響きが前面に出てきており、他方、前向きで広がるようなイメージのシーンでは、開放感に満ちた音の配置になっているのだ。ちなみに、コード進行にも注目してみると、A メロはマイナーコードに始まり、サビはメジャーコード

から始まっていることが分かるが、これも偶然の産物ではないはずである。

原曲では音の響きと歌詞の内容との間に以上のような連関があり、またそのような連関はある程度までは意図的に作られたはずだが、同様のメカニズムを他の言語に移し替えるのは至難の業であろう。上掲の「ありのままの」という日本語歌詞も、この箇所だけを取り出せば、確かに原曲の素晴らしさをかなりのところまで伝えていると言えるかもしれない。だが、例えば A メロ冒頭の「降り始めた雪は足跡消して」を見てみよう。この句は、英語版のような鋭さに欠けるといふばかりでなく、音符の数と文字の数が一致していないため、いわば字足らずと字余りが一つの句に混在しているかのような珍妙なリズムになっている。無論、これは訳者の過失ではなく、日本語という言語の音声上の限界に起因するものであろうが。

それでは、音声に関して英語により近い性質をもつ他のヨーロッパ言語はどうだろうか。鋭い響きに定評のあるドイツ語は、A メロの世界観と非常によく適合しており、出だしは全く違和感がない。ところが、サビ “Ich lass loss, lass jetzt loss” (私は解き放つ。いま解き放つ)に入ると、その魅力は半減してしまう。子音の数は全く減少せず、それどころか、“l” および “ss” という二つの子音の alliteration が行われてさえいる。つまり、英語版の A メロに関して指摘したような鋭さを作り出す音の配置が、ドイツ語版においてはサビにおいて登場するのである。それ故、いつまでたっても開放的な感覚が訪れることはないのだ。

優雅な響きで知られるフランス語はどうだろうか。歌い出しから流麗で、耳にとても心地よい。だが、その美しい響きは、実は歌詞の世界観に適合しておらず、むしろそれを破壊してしまっているきらいがある。フランス語版の場合、より力強いのはリフレインである。その第一行 “Libérée, délivrée” (自由になって、解き放たれて)にあるように、リフレインにおいて子音と母音の数はほぼ一対一の関係になっているのだが、実はそれだけではない。サビの最初の 2 行 “Libérée, délivré, je ne mentirais plus jamais. Libérée, délivrée, c’ est décidé je m’ en vais” (自由になって、解き放たれて、私はもう決して嘘をつかないわ。自由になっ

て、解き放たれて、もう決まったことなの。私は旅立つわ)の下線部に注目してほしい。母音「エ」、発音記号で記すとすれば“e”および“ε”が、執拗に繰り返されているのだ。

余談ながら、筆者はこの歌詞を見て、ランボウの名詩“L'Éternité”(「永遠」)を思い出した。冒頭“Elle est retrouvé. Quoi ? -L'Éternité”(見つけた。何が？永遠が)の下線部をご覧いただければ分かるように、母音全体の5分の3が「エ」の音で占められている。大雑把な区分からしても母音が10以上あるフランス語において、(日本人には聞き分けられない程に)類似した“e”と“ε”という2つの母音がこれだけ多くを占めているのである。こうした音の配置は特別な音声的効果をもたらしているのだが、前段落に説明したところを踏まえれば、“Let it go”フランス語版にも同じような効果が見出せると言ってよいだろう。ただし、看過できないのは、ここで採用されている母音が“e”(および“ε”)であり、その点で“o”で押韻する英語版と異なっているということである。日本語版およびドイツ語版は——ほぼ間違いなく意図的に——“o”という母音を用いて韻を踏んでいるのだから。

リフレインにおいて“o”という母音で押韻しているのは、日本語版やドイツ語版に限ったことではない。イタリア語版“All' alba sorgerò”(「暁に私は立ち上がる」)でも事情は同様である。“D' ora in poi, lascerò, che il cuore mi guidi un po' . Scorderò quel che so e da oggi cambierò.”(これから、少し、心の赴くままに行動するわ。知っていることを忘れて、今日から変わるの)——これがサビ冒頭の2行であるが、下線部を見れば分かるよう、全て、“o”という母音によって押韻されている。ところが、その点を考慮に入れたとしても、筆者にはこのイタリア語版は全く魅力的に聞こえない。その理由としては、例えば、以下の3点を挙げることができる。まず、はじめの“D' ora in poi”には、2回も二重母音が現れ、非常に重い響きになっている。また、次の“lascero”は本来二重子音(sc)を含むので「ラッシェロー」に近い発音になるはずだが、ここでは“let it go”のメロディーにそのまま当て嵌めているので「ラシェロー」というような促音なしの発音になってしまっている。

そして、“mi guidi un po' ”のところでは、アクセントが“po' ”という意味的に全く重要でない単語に落ちており、内容と音声の間に不自然な関係が生まれている。

このイタリア語版“All' alba sorgerò”は公式のものだが、実はこれとは別に“Frigida (Non la do)”という題のパロディが存在している。そして、筆者にしてみれば、このパロディこそが、イタリア人の天賦の才能がいかに発揮されたまぎれもない傑作なのである。“non la do”は、「私は体を売らない」ということを婉曲的に意味する、日常の話し言葉的な表現である。このパロディ版はつまり、女性が自分の体を武器に成功を収めていくことが日常茶飯事になっている現代イタリア社会を痛烈に批判しているのだ。しかも、外来語や固有名詞を駆使することより、音声的な側面においても公式のイタリア語版よりはるかに優れた出来栄えになっている。紙幅の関係で全体を詳説することはできないが、最後の方に現れる“Figa ma, per i cazzi miei”という行にだけでも触れておこう。かなり卑猥な表現ではあるが、それでもなお、筆者はそのうまさに思わず膝を打った。“figa”は「女性器」を示すとともに、派生的に「いい女」をも意味する。一方の“cazzo”は本来「男性器」のことだが、“per i cazzi suoi”という成句になると「(他人には関係なく)もっぱら自分のために」といったことを意味する。一文としては、両単語の派生的な意味を取って「私はいい女だけれど、男を相手にしないわ」と読めるのだが、その下にそれぞれの第一義が見え隠れするのがお分かりだろうか。

このパロディは、ただ面白いだけではない。非常に不思議なことだが、歌詞の内容は全くの別物であるにも拘わらず、それでもなお原曲のメッセージがしっかりと伝わってくる——少なくとも筆者には、そのように思えてならないのだ。

(京都外国語大学講師)

## 『ローマと美術③』

### ローマで双子育児

浅田 朋子

昨年、ローマで一卵性の双子女児を出産して、あっという間に8ヶ月が過ぎた。

高齢(39歳)、しかも帝王切開での双子出産の産後は、想像以上に大変だった。私は痩せ形ではあるが骨格はしっかりしており、体力は普通の女性よりかなりある方だと思う。だからまあ、双子でも体力的にはどうにかなるだろうと思っていたし、まわりからも「あんただったら双子育児も大丈夫」と言われていた。

でも現実はずんずん違った。私の体の栄養は、妊娠中になにもかも子供に吸い取られて、まさしく「用済みの抜け殻」状態、ズタボロである。出産後すぐの体重が、妊娠前の体重のマイナス2キロってどういう事？私、痩せたのか…。しかしありがたいことに、そんな体でもどうにか母乳は出た。完全に母乳だけで育てられるほどは出ないので粉ミルクと混合にし、毎日毎日おむつかえと授乳の日々。

産後2週間目、帝王切開の抜糸のため、産婦人科医のもとに行った。私の産婦人科医はプライベートドクターである。ちゃらっとした軽い感じの医師だが、優秀ではある。

帝王切開の傷がまだまだ痛み、育児疲れで顔色も悪く、髪もぐちゃぐちゃで訪れたのに「チャオ！元気そうだなあ！」と満面の笑みで言われてコケそうになった。「いや、あの、まだものすごく傷が痛むんで、あんまり元気ではないんですけど」と言ったが無視され、あっという間に抜糸された。またその抜糸の仕方、ギャンと一気に引き抜くのである。何力所か切って、一つ一つ丁寧にそと取るのではないのか？まるでカツオの一本釣りだ。産後の子宮は順調に回復しており「もう一回、双子妊娠できるよ！」と太鼓番を押された。もうええわ、この年で後もう一回妊娠したら、本当にもう、

体はもとに戻れない。

さて、私のポロぞうきんの体はさておき、ぴちぴち生まれたての双子は誕生三週間後、初めて小児科検診に行った。イタリアはホームドクター制で、住所登録地域の保健所指定の医師の中から自分のホームドクターを選び、登録する。登録後、その指定した医師のもとで無料で診察が受けられる。小児科もこのような手続きで小児科医を選び、登録する。私たちはわりと評判のいい、一番家から近い小児科医を指定した。新生児という事で別枠でもうけられた時間に診察してくれた。なかなか気が利いているではないか！

医師は女性で、年齢はおそらく60歳手前、エレガントな雰囲気だ。小児科医、といより弁護士事務所の秘書、みたいな感じである。落ち着いた雰囲気、ゆっくり話す。子供にも丁寧に接して「あ、なんかいい感じのお医者さんに巡り会えた！」と思ったが、これがなんというか、可もなく不可もなくというか、なんか物足りないのである。こちらは新米母親なので、あーせいこーせいと指導してくれた方がありがたいのであるが、なーんにも言わない。注意事項とか、これだけは気をつけてね、とういことも言わない。母子手帳もないので本当になんだか心細い感じである。



「ははは、小さいわね～」と当たり前からの反応から検診が始まり、身長・体重等を計った。この体重測定器、日本で今使われているのであろうか、あの重りを動かす旧式のものである。これで適当～に体重測定。心拍を聞く女医の横でしゃべりまくる義母。そんな大声で横でしゃべったら、心拍聞こえないじゃないか。でも先生は制する事もなく「うん、心拍オーケー！お魚みたいに健康ね！」と。(ローマでは健康の象徴に魚を例え、こういう言い

回しをする)。とにかく、たくさんの疑問と不安を残したまま、あっという間に最初の検診は終わってしまった。

それから一ヶ月ごとに、この適当な検診をうけ、先生曰く双子は「と〜っても健康に育ってる！」らしい。確かに親の目で見て健康そのものであるが、やはりいつも不安なのである。便の色がちょっといつもと違って、なんかえらい病気なのではないか、とか、本当に心配事はつきない。

そして6ヶ月、双子もいよいよ離乳食をはじめた。授乳や粉ミルクについては日本とイタリアは大体似た感じの基準であるが、離乳食は私が調べた結果、かなり考え方が違うので戸惑った。日本の育児書では、「離乳食はミルクでは足りない栄養分を補充するのはもちろんだが、重要なのは「噛む」「飲み込む」運動をして、さまざまな味や食感を覚えることである」と書いている。そして食べる楽しみを教えていくのである。

イタリアはちょっと違う。調理・食事方法はあまり重要視されず、ミルク以外のものをあげればそれでいい感じなのである。まず最初は「Crema di riso」というお米を粉末状にしたもの、もしくはタピオカ・トウモロコシの粉末を粉ミルクに混ぜて哺乳瓶で飲ます。そこに徐々に野菜スープなんかを足していく。離乳食は、スプーンであげるものではないのか…。ミルク以外の味に慣れさせているだけで、食事の練習になるのかな？とこの方法にかなり疑問を感じ、両母親に相談しつつ検討した結果、食材はイタリア式で、食べさせ方、進め方は日本式でいく事にした。一応、この方針で行く事を小児科医にも言ってみたら「いいんじゃない〜。日本食は健康にいいから〜。あ、でもお寿司はだめよ！生魚だから！」と言われた。いや、日本でも寿司は赤ちゃんにはあげまへん。日本の食材も使いたいのはやまやまだが、こちらで手に入る日本食材は新鮮でないし、子供に与えるには信用できない。

イタリア式「哺乳瓶ぶち込み式」離乳食は、なんと肉の粉末まであり、それも入れて混ぜてしまう。双子と同じ月齢の赤ちゃんがいるイタリア人宅にいった時、台所はこの「ぶち込み式」用の粉だらけで化学の実験室みたいになっていた。理屈的には「野菜粥とささみのすり身」だが、実際はミル

クに全部混ぜた恐ろしい飲み物の出来上がりである。いったいどんな味がするのか…。イタリアの赤子よ、がんばれ！



【イタリアの離乳食 左がCrema di riso】

私はこの米の粉末をお粥の代わりにして、ここに野菜を足し、肉は別にして葉物野菜などと和えてスプーンであげた。最初はもちろんお粥のみで、一つ一食材を足していった。

しかしイタリアの赤子もこの「哺乳瓶にぶち込み式離乳食」を乗り越えると、「あら、素敵なイタリアンな離乳食」が待っているのである。野菜をコトコト煮込み、最後に新鮮なパルミジャーノレッジャーノチーズをさらりと振りかけエクストラバージンオイルを数滴たらすのである。いきなりイタリアンレストランみたいな食事に大変身。いや、待て。チーズはすごくカロリーが高いし、塩分もすごい。ええんか、そんなん6ヶ月の子供にあげて。「体にいいの！オリーブオイルは健康にいいし、チーズはカルシウムが豊富」とみんな口をそろえて言う。塩分はどうでもいいのか？生オリーブオイルが健康にいいのは何となくわかるが、離乳食初期の赤ちゃんに生っていいのかな？いろいろ疑問が残るので今のところチーズはあげていないが、オリーブオイルは義母があんまり「あげた方がいい！」というので何回かあげてみた。まあ、特に何も問題は起ってないが、急いであげる事もないのでたまにしかあげていない。

でもこれを他のイタリア人にいうと「えー！！味しないじゃない！かわいそう」と言われる。日本では素材の味を覚えさせるのが大事なので、最初は調味料を加えない。こちらの離乳食の感覚は大人の味覚が物差しなので(ぶち込み式は違う

が。)割と平気で味付けする。

日本ではお菓子の部類にはいるから初期にはあげないが、こちらでは赤ちゃん用ビスケットを4ヶ月から離乳食前の練習にあげている人が多い。このビスケットも、もちろんミルクに溶かし哺乳瓶にぶち込む。このビスケット、子供のおやつとしてイタリアではものすごく有名である。夫もこのビスケットを私が家を買って帰った時「おお！！なんて懐かしい！！プラ～ズモン～（メーカーの名前）」とCMの歌を口ずさみだした。しかしこのビスケット、異常に甘い。甘すぎて喉が渇く。これを甘い粉ミルクにさらに足して飲むなんて、頭痛がおこりそうである。双子にも柔らかくしてスプーンであげてみたが「べえっ」と吐き出した。うん、君たちの味覚はただし、母はうれしいよ！義母が家に来てプラズモンのビスケットが減っているのを見て「あらあ～、やっぱりこれは大好きなのね～」と嬉しそうだったが、それ食べてるの私やねん。双子が食べないので、私がおやつがわりに毎日食べていたのである。



さて双子も離乳食中期になってきて、ペースト状から少し形あるものも食べる練習をはじめた。そして最近小児科医からOKが出た素材、それが「トマト」。イタリアではなぜかトマトは7ヶ月頃からしかあげてはいけな。何にも言わない小児科医に、これは「まだダメ！」といわれた。初めて煮トマトを双子にあげてみたら、とても気に入ってパクパク食べた。これに義母は大喜び。さすがイタリア人とのハーフ。トマトはソウルフードだからね。これを外すとイタリアで食べられる料理の数が激減するので、トマトが好きというのはとても重要だ。トマトを食べられるようになってから義母は「もうすぐおばあちゃんが、おいしいイタリアの離乳

食つくったげるからね！」とおおはりきりである。あとは、私がパルミジャーノチーズを解禁するのを、今か今かと待ちわびている。離乳食と一緒にあげるたびに「パルミジャーノ、かけないの・・・？」と聞いてくる。

イタリア式の離乳食に疑問に感じる部分もあるが、ローマで生まれ、これからこの土地で成長する双子には、ここイタリアで昔から食べられているものを楽しく食べさせていき、魚のように健康に成長して欲しいと願う。

(元当館受講生)

### ～会館だより～

#### イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

7/1(水)11:00～12:30 7/4(土)11:00～12:30

●四条烏丸：ウイングス京都

6/29(月)19:00～20:30

#### イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

6/27(土)15:00～(各人30分ほど)

#### スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

7/4(土)11:00～12:30

#### ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

7/1(水)13:00～14:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>